

4 1人1台端末の利活用に関する計画（特別支援学校・義務教育段階）

令和7年6月

1. 1人1台端末を始めとするICT環境と目指す学びの姿

令和4年3月に策定した「富山県特別支援教育将来構想」の6つの視点の1つとして、「ICTや専門家の活用等による指導の充実」を掲げ、新しい技術を活用して、一人一人の可能性をさらに広げる指導や、一人一人の状態に応じた最適な指導を行えるようにすることを大切にしている。その中で、子供たちが、一人一人の教育的ニーズに応じたICT機器やその機能を効果的に活用し、主体的に学習に取り組む姿を目指して取組を進めているところである。

2. GIGA第1期の総括

本県では、GIGAスクール構想の下、令和2年度から令和3年度にかけて、県立特別支援学校小・中学部児童生徒の1人1台端末環境整備を完了した。

また、端末等ICT活用の基盤となるインフラ整備にあたっては、令和2年度に生徒用LANの整備が完了し、令和4年度までにインターネット通信環境のローカルブレイクアウト化を実施するなど改善を図った。

県立特別支援学校においては、ICT機器の活用により、一人一人の障害の状態や特性等に応じて、コミュニケーションツールや学習課題に応じたアプリ等の効果的な活用が進んできた。また、大型提示装置等を使った協働的な学びを進めてきた。

それに伴い教職員のICTの知識、技能の必要性が高まっている。その課題解決に向けて基本的なICT機器の活用方法の研修会はもとより、令和5年度、令和6年度は、県教育委員会と特別支援教育における支援技術普及のための連携協力関係にある富山高等専門学校より特別指導者を招き、1人1台端末環境を生かした特別支援教育におけるICT活用について、各年10回の講義や演習を行った。

3. 1人1台端末の活用方策

GIGAスクール構想第2期で更新する1人1台端末について、その効果的な利用促進に向け、次の3つの視点から取り組んでいく。

(1) 1人1台端末を積極的に活用するために

県立特別支援学校においては、障害種、障害の程度に応じて1人1台端末の使い方は様々であり、児童生徒自ら調べたことや考えをスライドにまとめ発表している学校もあれば、音声言語による会話が困難な児童生徒自らが、コミュニケーションアプリを使用して、要求や気持ちを伝える一助としている学校もある。多くの特別支援学校で効果的な取組を行っている一方、それらの情報は学校内だけで共有されていることが多い。各学校が行っているICTを用いた様々な取組を学校間で共有し、障害があっても多様な手段を用いることで、児童生徒が楽しく学習に参加し、学びが深められ

るよう支援を図る。

(2) 個別最適・協働的な学びの充実を図るために

県立特別支援学校では、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、一人一人の教育的ニーズに応じた実践をこれまでも行ってきたが、1人1台端末の整備以降、より個に応じた学びを充実させることが可能となっている。

場所を選ばずに全ての授業の中でいつでも児童生徒自らが物事を調べることができるようになり、さらに、発表のツールとしても児童生徒の障害種や障害の程度に応じて、プレゼンテーションソフトを使う児童生徒もいれば、写真やイラストで発表を行うなど、発表形態の多様化が見られてきた。

今後は、特に、小規模の県立特別支援学校においては、児童生徒の意見や考えを発表する場を広げ、学びに豊かさを増すことができるよう、県内の他の特別支援学校や他県の同障害種の特別支援学校とのオンライン交流を推進していきたい。

(3) 全ての児童生徒の学びを保障するために

県立特別支援学校においても、障害の特性により学習環境に馴染めずに不登校傾向になる児童生徒が見られるようになってきている。また、病気療養中の児童生徒の中には、教室で学習することが困難な者もあり、そのような児童生徒には、1人1台端末に教材や授業中の動画配信を行うことで、切れ目のない学びを保障している。また、日本語に通じない外国籍等の児童生徒には、マルチメディアダイジェスト教科書等の音声教材を活用し、学習に取り組めるようにしている。障害の特性等から心身の不調を訴えにくい児童生徒には、早期の教育相談的アプローチのきっかけを増やすために、1人1台端末を活用することを検討する。このようなICTの活用の前提には、ICT機器に対する慣れが必要となることから、校内での教職員研修の実施、日常的に授業の中で児童生徒がオンラインツールを利用するなど、教職員及び児童生徒へのオンライン学習の円滑化に向けた支援を図っていく。

これらの取組を推進していくために、本県としては、端末の整備・更新により児童生徒向けの1人1台端末環境を引き続き維持する。